

第5回足立区総合教育会議

日 時 平成27年9月24日(木)午後2時開会
場 所 足立区役所8階 庁議室

1 乳幼児期における関連団体における活動等について

中村政策経営課長

それでは、皆様おそろいでございますので、ただいまより平成27年度第5回足立区総合教育会議を始めさせていただきます。

議事の進行に先立ちまして、本会議の主宰者であります近藤足立区長よりご挨拶をさせていただきます。

近藤区長

お忙しいところ、ありがとうございます。ご承知のとおり、この教育大綱を定めて、区長と教育委員会が一体となって子どもたちの健全育成に努めていくようにという国の方針が変わったことを受け、皆様方にお集まりいただいて、区の方針についてぜひ、特に乳幼児期における考え方についてご議論またはご指摘、ご指導いただきたいということでございます。限られた時間ではございますけれども、これからの足立区の子どもたちのあり方、教育の方向性を決定していくに当たっての大変重要な大綱になってまいります。言葉はよいかわかりませんが、教育部門での足立区の憲法的な立場ですので、ここから教育委員会のさまざまな個別のプログラムもつくられていくということになる骨太の一番の根幹の考え方でございます。忌憚のないご意見をいただきまして、少しでもよいものをつくっていききたいと思っております。ご協力をよろしくお願い申し上げます。ありがとうございます。

中村政策経営課長

それでは、最初に、会議の運営等について私から説明をさせていただきます。

申しおくれましたが、本日の進行を務めさせていただきます政策経営課長の中村でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

まず、本会議でございますが、公開を原則としております。会議記録はホームページ等で公開させていただきます。また、会議録作成のために皆様のご発言は録音させていただいておりますので、ご了承ください。

次に、お配りいたしました資料について確認と簡単な説明をさせていただきます。

まず、一番上が平成27年度第5回足立区総合教育会議次第でございます。

その後ろに本日の出席者名簿、区側の出席者名簿と、それから、乳幼児期と成人期の本日ご出席いただいている皆様の名簿をそれぞれ1部ずつつけてございます。あわせて席次表、それぞれ1枚ずつご用意してございます。

それから資料1がA3判1枚のものでございます。簡単に説明させていただきますと、これがこれまで3回ほど会議で検討しました足立区教育大綱(案)でございます。教育大綱と書いた四角の網かけになっているところに「夢や希望を信じて生き抜く人づくり」とございますが、これが今、大綱の基本理念と考えているものでございます。

そして前文には、この基本理念を打ち立てた理由を記載してございますが、簡単にご紹介します

と、2つ小見出しがございますが、最初の小見出しには「誰もが子どもを支える主役」とありますけれども、この中に「教育大綱とは」とか「教育の使命」について説明しており、子どもたちを育て上げていくために、家庭、学校、地域のみならず、社会全体で連携して支えていくということをここに盛り込んでございます。

また、もう1つ小見出しとしまして「貧困の連鎖を断ち切る教育」とございますが、足立区におきます深刻な問題である貧困の連鎖を断ち切る、これが教育の重要な役割であるとした上で、この教育におきましても、厳しい環境にあるお子さんでも、同一のスタートラインに立てるような、そういった支援をしていくということをこの中に盛り込ませていただいております。ここが足立区の教育大綱の大きな特徴と考えております。

そして右側には、それぞれ乳幼児期、青少年期、成人期という3つのライフステージごとの世代別理念を掲げております。今日ご意見を賜りますのは、この乳幼児期の部分でございますが、「様々な出会いや関わりを通じて、たくましく成長するための素地をつくる」という理念を打ち立てながら、この乳幼児期、これから人間形成の基礎となるような時期ですので、いろいろな感性とか、そういった喜びを自信に変えていくなどのことをお子さんに身につけていただくとともに、基本的な生活習慣ですとか、そういった本当に基本基礎になるようなところを身につけていただきたい、そういった理念をここに書かせていただいております。

また資料2、A4判1枚ですが、こちらには先ほどの理念を実現するための施策の柱になるものを書かせていただいております。これも乳幼児期、青少年期、成人期とそれぞれ施策の大きな柱を書かせていただいておりますので、これについてもぜひ皆様からご意見を頂戴いたしまして、よりよい施策体系をつくってまいりたいと考えてございます。よろしく願いいたします。

また資料3としては、これからの総合教育会議の事務日程をつけさせていただいております。

なお、参考に成人期の資料として「日本の若者の現状」という資料を、これは今日ご出席の先生からのお話の中で使わせていただく資料でございますが、参考にご用意しております。

また、本日ご出席いただいた皆様には、第3回の議事録の写しを席上にご用意させていただいておりますので、それもあわせてご参考にさせていただければありがたく存じます。

それでは、議事に入ります前に、まず本日の出席者の方々のご紹介をさせていただきたいと思っております。

まず、近藤やよい足立区長です。

近藤区長

お願いいたします。

中村政策経営課長

続きまして、定野司教育長です。

定野教育長

定野です。よろしく願いいたします。

中村政策経営課長

小川正人教育委員です。

小川（正）委員

小川です。よろしくお願ひいたします。

中村政策経営課長

桑原勉教育委員です。

桑原委員

桑原です。よろしくお願ひいたします。

中村政策経営課長

花岡恵三教育委員です。

花岡委員

花岡です。よろしくお願ひします。

中村政策経営課長

小川清美教育委員です。

小川（清）委員

よろしくお願ひいたします。

中村政策経営課長

続きまして、本日ご出席の団体の代表の方のお名前をお呼びいたします。

まず、足立区私立保育園連合会会長、川下勝利様。

川下会長

川下でございます。どうぞよろしくお願ひいたします。

中村政策経営課長

足立区認証保育所連絡会会長、廣島清次様。

廣島会長

廣島でございます。よろしくお願ひします。

中村政策経営課長

足立区小規模保育室連絡会会長、岩崎恵一様。

岩崎会長

岩崎でございます。よろしくお願ひいたします。

中村政策経営課長

足立区立保育園長会会長、増田久美様。

増田会長

増田です。よろしくお願ひします。

中村政策経営課長

足立区私立幼稚園協会副会長、古庄宏吉様。

古庄副会長

古庄です。どうぞよろしく申し上げます。

中村政策経営課長

足立区私立幼稚園父母の会連合会会長、山口友紀様。

山口会長

山口です。よろしくお願いいたします。

中村政策経営課長

足立区民生・児童委員協議会主任児童委員会委員長、小宮謙治様。

小宮委員長

小宮です。よろしく申し上げます。

中村政策経営課長

NPO法人子育てパレット代表理事、三浦りさ様。

三浦代表理事

三浦です。よろしくお願いいたします。

中村政策経営課長

以上の皆様でございます。

これより議事の進行は区長にお願いいたしたいと思えます。ご紹介いたしました順に皆様からご意見をいただければと存じます。お時間については時間の都合上、三、四分程度とさせていただきますと思えます。どうぞよろしくお願いいたします。

それでは、よろしくお願いいたします。

近藤区長

その前に、少々補足をさせていただきたいと思えます。こちら教育大綱の案ですけれども、「夢や希望を信じて生き抜く人づくり」、これを基本理念に据えた、それこそ基本的な考え方でございますけれども、足立区の場合、子どもたちがなかなか自己肯定感、自己優位感、効力感というのを持っている子たちばかりではない。また、夢や希望というのはごく恵まれた家庭の、恵まれた条件にある子どもたちが持てるもので、どうせ自分たちはそういったものは持てるものではないというような諦めというか、あとは小学校の低学年の頃から、別に働かなくても生活保護で生活していかれるのだという発言が子どもから出るというような現場の話も聞きますと、経済的に困窮しているような厳しい家庭、例えば一定程度親からネグレクトをされているというような、子どもが親からスポイルされているような現実に直面しても、非常に厳しい言い方でありませぬけれども、そういった状況であっても夢や希望を信じることができるような、まあ、理想と言えれば理想ですが、そういった環境や事業といったものを、区として責任を持って提供していくのだという思いがここに込められて

いるとご理解いただければと思います。

それと貧困の連鎖につきましては、今年を「子どもの貧困対策元年」と位置づける云々というお話も至るところでさせていただいております。全国的に、まだ自治体規模でこの子どもの貧困について具体的に動いている例が少ないということもあって、政府のこうした子どもの貧困対策という切り口で、何かマスコミ報道がされますと、私はありがたいことだと思っておりますが、必ず足立区が取り上げられるという傾向がございます。

一部では、こういったことをテレビで見られると、足立区のイメージが貧困ということで、悪い意味で固定化されてしまうのではないかとのご懸念も既にいただいているという事実は、私自身、認識しております。

一方で、この貧困という言葉がひとり歩きしているような状況があって、戦後の誰もがみんな食べることに困っていたという時代ではなく、貧困というものは見えなくなっているということとか、経済的な問題ばかりでなく、社会からの孤立、情報からの孤立ということも一種の貧困ということでございますし、リストラとか健康上の問題とか、または離婚といった、ごくごく誰にでも起こり得る状況によって貧困に陥るリスクは、誰もが今、ほとんど等しくと言ってもよいと思いますが、等しく持っているリスクであって、ごくごく限られた人にある特別な課題、問題ではないという認識が、まだまだ社会的な通念として広がっていったいない。

ですから、確かに困窮、貧困ということで足立、足立と言われることによるイメージダウンというものは一方で考えなければいけないとしても、現実問題そこを乗り越えていかない限り、本来足立区に今レッテルを張られているような社会構造的なマイナスのイメージは完全払拭できない。やはりそこは避けて通れない、逃げられない問題なのだという意識で、区を挙げて、区民の皆様方と一緒にあって、少しでも改善していくという努力をするということ、そして一定程度の効果を上げていかなければなりません。

足立区だったからこそひとり親家庭でも何とかあったとか、経済的に厳しい家庭の子どもが、大学に行くことが全てとは思いませんが、きちっと経済的に自立して家族を持っていくことができる、そうした区のあり方、足立区の姿勢、スタンスというものを示していくということは、私は本来的に根幹的な足立区のイメージアップにつながるようになってくると思っておりますので、いろいろご懸念はあるかと思いますが、これはぜひとも乗り越えていかなければならない試練というか、区に課されたミッションという思いで、あえて貧困の連鎖を断ち切るということを一課題と掲げさせていただいて進めております。

当初、犯罪のときもそうでしたが、そこまではっきり出さなくても、うまくオブラートに包みながら進められないのかというお話もございます。それはそれで本当にありがたい、区を思っていたくご意見だなと承っておりますが、今状況がどこまで厳しいかということ、そしてそれを乗り越えていくのだという、絶対的な揺るがない信念のようなものを出していかないと、区民の皆様方にもなかなかご協力いただけなかったり、物事が動いていかないということもありますので、あえて

足立区は王道を行きたいということでございます。

駄弁を弄して恐縮でございましたが、その辺がこのたびの教育大綱の底辺に流れている脈々とした子どもに対する思いであるということを受けとめていただけたらと思います。

冒頭長くなって大変恐縮ですが、それでは、それぞれのお立場からご意見を賜ってまいります。

まず最初に、足立区の私立保育園連合会から川下会長、お願いいたします。

川下会長

ありがとうございます。私立保育園連合会、川下です。私は3点ほどお話をさせていただければと思います。

まず1点目は、保育所ということですので、当然教育ということで、3歳以上だけではなくて、0から2歳児までも含めて保育イコール教育というものを私たちは担っているのだというような気持ちであります。

特に、もうここに書かれているように、家庭支援ということから言えば、当然、今の実際に保育園に来ていた保護者の方々は、まだ小学校、中学校で心配されているような子どもの対応の仕方ではなくて、ごくごく自然に子どもたちと関わっているのだらうなと思うのです。ですから、それが何でそういう子どもが大きくなってきたときに、困ったなというようなことになってしまうのか。結局、やはりその子育てに対する無知、子育てをよく知らなくてそのまま子どもたちが大きくなっていってしまうというようなことがあるのかなと思っています。ですから、その辺の子どもの成長の仕組み等も何かの形で、まさにその家庭支援という形で伝えていければなと思っています。

2点目ですが、子どもは私立保育園ということですので、今ここでいろいろ議論をさせていただきながら方向性が決まっていくかなと思うのですが、もちろんこういう形の最終形はあると思うのですが、そこに行き着くための手段は、個々の園でもいろいろ考えることがあって、一つの道だけではないと思っています。ということで、その最終形はお示しいただけるのですが、そこに行く道のりについては、やはりその私立保育園の独自性もぜひ大切にしていきたいなと思います。

次に3点目です。これは制度上の話ですが、この4月から認定こども園の制度が新しくなりました。特に幼保連携型の認定こども園ということで新しい制度の中で発足したわけですが、例えば現在の私立の認可保育園が幼保連携に移行するようなことがスムーズにできるのか、また、一番大きなところは、実際に公設民営の保育園がそのまま幼保連携型の認定こども園に移行することができるのかどうかというようなところもぜひ考えていただけるとありがたいなと思います。

私立保育園ですので、このように決まったから、こうなさいということではなくて、ぜひその事業者に対しても丁寧なご説明をしていただけるとありがたいと思います。

以上です。

近藤区長

ありがとうございました。

それぞれご質問はコメントをいただいた後に出していただければと思います。

それでは足立区認証保育所連合会、廣島会長、お願いいたします。

廣島会長

足立区の認証保育所の廣島でございます。今、川下先生からお話しいただきまして、同じような立場から、重複しないような形でお話をさせていただきたいと思えます。

個人的に、私もこの保育園に携わってもう40年になります。実は保育園、幾つかの形態がございます。もう皆さんご案内のとおり認可、あるいは認可外と言われるように大きなくくりとして2つあるわけですが、東京都の認証保育所は平成13年8月に北千住に第1号が発足しまして、以来、今東京全体で720ぐらいあるわけですが、実は東京都認証保育所は、区分けをすると認可外という区分になってまいります。ただ、認証保育所ができた経緯は、実は大きな考え方として、東京から日本の保育を変えるという、今まで従来、保育の非常に硬直化した制度の中で、いわゆる多様化するさまざまな利用者の声をどう吸収していくかということで、実は13時間開所であるとか、あるいは0歳児からというようなことで、さまざまなご批判もいただいた時期もございましたけれども、今、着実に認証保育所そのものが大きく社会的な信頼を得て、地位を確保したと理解しております。

実は今冒頭、区長から大綱についてのお話を伺いまして、私も全くそのとおりだと非常に共感するとともに、この足立区においてこのような形で、将来にわたっての考え方を取りまとめていくということは非常に大事なことだと思います。

あわせて、実はこの2番目の中で貧困という言葉が、さまざまなご意見があるとは重々承知はしておりますが、やはりこれを切って考えることはできないのではないかと、私は経験的に考えております。

実は保育園、認可保育園、公立も含めまして、認可保育園に入れるお子様は、もうある意味では恵まれた環境の家庭であると。実は足立区の中で私も40年ずっと来ておりますが、今日どうする、あしたどうするという緊急的なことについて、あるいは単身家庭になってしまったというような、非常に急を要するようなことについての受け皿は、現制度の中では全くないわけです。

ましてや今、この待機児童ということで、要件を満たしていてもなかなか入れないという状況の中で、私はこの貧困というものは、生まれたその瞬間にもう既に始まっていると。実は私は特にそのことを声を大にして申し上げて、あらゆるところでお話をさせていただいております。実は預けるところがないということがそもそもの出発点。そして、それが短時間、あるいはご婦人が短い時間働くということについての受け皿が、やはり現状として整っていない。実は認可外と言われるところがその吸収をして、今まで歴史的に進めていたということで、長くなりましたので、このくらいにしますが、実はこの教育大綱の中で、今、冒頭区長がおっしゃったことについて、私はぜひともそれを今後の中で生かしていただければと希望しますとともに、今後ともそういう取り組みをしてまいりたいと思っております。

ありがとうございました。

近藤区長

ありがとうございます。

それでは、小規模保育室連絡会の岩崎会長、お願いいたします。

岩崎会長

では、私のほうから説明させていただきます。まず、制度的には皆さんご存じだと思うのですが、小規模保育は0歳児から2歳児のお子様を19名までお預かりする非常に小さな施設でございます。やってみますと、一番大事な時期に少人数で一人一人見られるという非常にメリットがある制度かなと思っております。足立区においては現在21施設で、もう既に370名近くのお子様を預かるような組織となっております。

そういう特性があるので、私は、他の区でも同じく小規模のほうを積極的に手を挙げてやらせてもらっているのですが、やはり今年の新制度に伴いまして、昨年までは足立区の小規模というものに関しては、非正規雇用の方のお子様を預かるということで、本当に他の区にはない、理念を持った、素晴らしい制度であったと思っております。他の区と比べても素晴らしい制度であるなというところであったのですが、どうしても新制度になりまして、私どもを含めて、新しい国の制度にのみ込まれてしまったという思いがありまして、何とかその部分で区の今までの理念というか、そういうものを残していただいて、パートタイムであるお母様のお子様をしっかりと預かれるような、そういう部分を残していきたいなということで、協議会の中でもいろいろ議論をしているのですが、なかなか難しい部分があるのですが、その貧困という部分からしても、そういうきちとした正社員になれない方のお子様をしっかりと預かれるような制度を残していきたいと思っております。

以上です。

近藤区長

ありがとうございました。

それでは区立保育園の園長会、増田会長、お願いいたします。

増田会長

私ども公立保育園では保育内容の充実を図っております。遊びを通して意欲と考える力を育てるというところに重点を置いて、毎日保育をしております。0歳から6歳までのお子さんをお預かりしているというところでは、人生の一番初め、生涯の初めのところで大人との信頼関係をしっかりと築き上げること、そして、その信頼関係の中で1歳後半から2歳にかけての自己主張をしっかりと受けとめてもらい、自分が気持ちを受けとめてもらえる人間だという安心感と自信を持って幼児期に移行していく。

そして幼児期には自分たちが楽しく生活する、快適に生活するために必要なルールを自分たちで考える。そのためには体験というものを大事にしています。体験というものは、日々の中で知りたい、読みたい、書きたい、そういうことを必要と感じるような保育を行っていくということで、今、保育内容の充実というところで毎日目ざしてやっているというところ です。

乳児期に何々したいという意欲を育てること、そしてそれを自分で選んで、保育者に与えられて行くのではなくて自分で考えること、それを幼児期の間にしっかりとしておくことが、小学校に行っているの学力、学びたい、書きたい、読みたい、知りたいという力の基礎になると考えて、今、幼児教育の充実を図っているところです。

以上です。

近藤区長

ありがとうございました。

それでは、私立幼稚園協会の古庄副会長、お願いいたします。

古庄副会長

私立幼稚園協会の副会長の古庄と申します。足立区には52園の幼稚園がございまして、満3歳から就学前の子どもたちの教育をしております。就学児童の6割が幼稚園からの卒園生だということですので、その責任は重いと日々感じております。

幼稚園に子どもを上げる保護者、ほとんどは長男や長女の親御さんなわけですね。子どもは少ないですから初めて親になる。子どもの教育もございしますが、そういう保護者の方に、家庭でのどういう教育が大切なのか、そういうことを示していくことが、幼稚園では大切な一つの課題だと思っております。

足立区でも「早寝・早起き・朝ごはん」ということを推進しています。では、なぜそれが必要なのか。それは昔から言われていることですが、保護者の方は意外によく知らない。夜でも小さいお子さんを連れて歩いている方をよく見ます。

今ここで貧困という問題が出ておりました。高校生の中退が多い問題も出ております。その根本にあるのは、やはり生活習慣ですね。朝ちゃんと起きられない、夜遅くまで起きている。もちろんそれはゲームがあったり、いろいろなこともあるのでしょうけれども、そういう生活のリズムがちゃんとできる、それがまず第一だと思っています。そういった大切なことを保護者の方に伝えていく役割も、1つ私たちが持っているものだと思います。

そして子どもの教育については、幼児教育は小学校の教育とは違いがございまして。学科ごとに物事を学んでいくというよりは、総合的な学習の場ですので、いろいろな体験をそれぞれ子どもたちが経験する中で、人との関わり、物の大切さ、人の大切さ、物事をやり遂げる達成感、そういったものを通して生きる力を育てていく、そういう場だと思っております。

ここで最近、子どもを預かる時間が長時間化している。もちろん待機児が多いということもありまして、行政も子どもを預かるということに重点を置いていると思いますが、果たしてそればかりでよいのだろうか、ワーク・ライフ・バランスと言われながらも、そちらは全然推進されていない。子どもが家庭で過ごす時間がどんどん短くなっている。もちろん家庭に問題があれば、家庭にいるほうが悪いなどというご意見もあるかもしれませんが、そうやって家庭で子どもたちと親が関わ合う、その中で親は親らしくなっていくのであって、そういう時間を奪い過ぎてはいけない、必要

以上に預かってはいけないと考えております。

以上です。

近藤区長

どうもありがとうございました。

それでは、私立幼稚園父母の会連合会の山口会長、よろしく願いいたします。

山口会長

私立幼稚園協会父母の会連合会の山口と申します。私は保護者の立場からということで、先ほど古庄先生がおっしゃっていたような感じなのですが、幼稚園はすごく短い時間で子どもを預かっていただくところですが、やはりその後、帰ってきてからの触れ合いとか、また、幼稚園の中でも親の出番、行事のお手伝いとか、そういう親が出ていくところで、そういった姿を見ることも子どもたちはすごく喜ぶことで、そういうところもちょっと大事ではないかと考えております。

あとは教育のことで、先生とのコミュニケーションをとって、幼稚園に預けている間の子ども様子を聞いたり、その連携をしっかりとっていくということは、その後の小学校、中学校と上がっていくに従って、その学校などとの連携を強くしていくことはすごく大事なことでないかと感じます。

あと、幼稚園はやはり3歳からなので、その幼稚園に入れる前の段階が、やはり親子で、例えばお母さんと子どもという、本当に他と関わりがなかなか持てないところがあるので、そういったところを支援というか、していただくと、幼稚園に入ったときなどに、その後の流れがうまくいくのではないかと思います。

結構孤独になってしまうことが多いので、やはり言葉がわからない子どもと本当に一日中二人っきりで話すというか、会話はできないので話ではないですね。もう言葉のわからない子どもと一日過ごすということが、やはり母親としてストレスがたまることもあるので、そのようなときに何かできる支援のようなことがあればもっとよいのではないかと感じます。

以上です。

近藤区長

ありがとうございます。

それでは、民生・児童委員協議会主任児童委員会の小宮委員長、よろしく願いします。

小宮委員長

主任児童委員会の小宮です。福祉ということで、多少そっちの方向に話が偏るということもあります。ご承知おきいただきたいと思います。橋本部長にご推薦いただきまして、話を聞いてくるよふにということですが、今日は多少意見も言わせていただくということで、私、主任児童委員を14年やっている経験の中で感じたことをお話しさせていただきたいと思います。

まずはこの教育大綱を拝見して、じっくり読ませていただきました。ぜひとも具体的な施策で効果あるものに仕上げさせていただきたいと思います。

ご存じの方ばかりではないと思いますが、足立区では550人の民生・児童委員が存在しまして、その中から比較的若い層、学校とのつながりが強い層を中心に50名が主任児童委員ということで厚労省から指名を受けます。担当は妊婦から児童福祉法で言う18歳まで、ひとり親家庭については20歳までと担当の年齢は制限される、これが民生・児童委員の児童委員としての仕事ということになります。

私たちはその中でも児童福祉を専権にするということで、児童委員の方々とともに地域で問題のある方々に寄り添って、時には見守り、時には相談に応じ、また時には行政の資源をどう活用するかというようなことをアドバイスするというので、地域児童福祉の底辺の受け皿だと私は日ごろから申し上げています。

昨年度、平成26年度、主任児童委員は約200件の子どもの相談を受け付けました。50人ですから1人4件ほどということです。学校や地域の方々からご相談をいただいたときに、まずは担当の児童委員の方と家庭訪問をすると、そこに見えてくるものは貧困であり、孤立ということになります。

私たちは、親も子どもの問題で苦勞しているの、そこに寄り添って相談相手になりなさいということで、委員の方々には話をすることが私の立場です。

かつて保健総合センターの保健師の方と4カ月の定期健診、あるいはその後の定期健診にどうしても来てくれない家庭があるというご相談を受けました。私は保健師の方と一緒にその家庭にお邪魔して、今は大分大きくなりましたが、今でもおつき合いがあります。そういった地域の目で、そういったグレーゾーンと言うのでしょうか。児童相談所とか警察とか病院で受ける案件は、言ってみればレッドゾーンで、これについてはある程度の行政の対応が行き届く。ところが、今申し上げたような定期健診にも来ない、子の育て方も知らないという親、こういうところにいかに接点を持つかが大事だろうと申し上げました。

結局そういったご家庭は、小学校へ行っても、中学校へ行ってもずっといろいろな問題を抱えながら成長していくということが常かなという感想を持っています。

ちょっと枠を外れるかもしれませんが、私はお年寄りの孤立の問題、孤立ゼロプロジェクトでうちの町会も300件の調査が終わりましたが、お年寄りの孤立と子育ての孤立をうまく結びつけて、お年寄りが子育てに応援する、また、若い層がお年寄りのお世話に力を出すというふうな形の取り組み、こういったことはなかなかおっしゃる方はいないのですが、こういったことをひとつ制度的に形にできたらよいなと日ごろ思っています。

2世帯住宅をどう推進するか、どういう改造資金を応援するか、いろいろな問題があるかと思いますが、やはり私はそれぞれの力をこの2つの面に生かせるような方向性を、ぜひ行政のほうで知恵を出していただければと思っています。

以上です。

近藤区長

ありがとうございました。

それでは、NPO法人子育てパレットの三浦代表理事、お願いいたします。

三浦代表理事

NPO法人子育てパレットの三浦です。私たちの活動は子育て支援とうたっておりますが、実際はマタニティー時期のものから幼稚園入園前を中心に母親支援をしております。私たちはこの時期に最も重要なこと、大切なことは母親の心の状態だと考えています。

子育てにおいて一番不安と迷いの中にいる時期でもあって、ここをしっかりとサポートできれば、あとは子どもを通して親同士の社会もできていき、不安や迷いが出ても解決していく力につながっていきます。

子どもにとってもアタッチメント、愛着関係をしっかりとつくり、家族の中がファーストコミュニケーションの社会だと思っているので、その中でコミュニケーションすることは楽しいのだということをしかりと親子の間でできることで、その後、幼稚園などへ行って、お友達とのよい社会が築いていけるのではないかと考えています。

最も重要な役目となる母親が、我が子を見て、他人とかいろいろな情報などに惑わされることのない我が家の子育てができるようになること、少しのことで倒れることなく、しっかりと立つことができるようになることで、初めて子どもとの良好な関わり合いができる時期だと思っています。

初め赤ちゃんは、子どもたちは言葉はわかりませんが、みんな動物的な勘というか、そういうものがたくさんあって、お母さんがどのように思っているか、ママの心はすごくわかると思うのですね。お母さんたちも、昔の子育てだとマニュアルなどがなかったので、自分の子どもを見て、ああ、この子は今こうしたいんだ、ああしたいんだと本能でわかって子育てをしていたと思うのですが、今は情報がたくさんあって氾濫しているし、子育て本もあればインターネットの普及などもあって、マニュアルから外れたり隣の子と違うと、不安や迷いの中にどっと陥ってってしまうということがこの時期の特徴になっていると思うのです。やはり心の余裕がある母親が育つことが、世代別理念の中で一番大切かなと思っています。

もう1つが、シングルマザーに対する「一番最後に生まれた子どもが何歳のときに離婚しましたか」というアンケートによると、一番多い回答が0から2歳となっています。末の子が生まれてすぐの時期に離婚する割合が全体の3割と言われていています。そして一番多いそうです。

少子化が進んでしまっているのも、産んだ経験のある世代の出産数が1.4ということをもふまえると、ほぼ1人目を産んで、2歳までの間に離婚する確率が高くなっています。

産後の父親の対応によって、今、産後クライシスとか言われていますが、離婚を考えたり、離婚まで行かなくても、もう次の子は産まない、2人目は産みません、あなたの対応では嫌ですというママたちがすごく増えていると思うのです。

そうなってくると、シングルマザーの貧困問題はお金だけではなく、もちろん子どもにも影響がありますし、3歳までに必要な支援として、増加している産後鬱や、「数値でははかれないけれども、虐待しそうだけれども、一縷の理性で何とか思いとどまっている」、先ほども何度かお話があったグ

レーゾーンの虐待予備軍や少子化問題、貧困問題の歯どめになるためにも、この時期の母親が一番ポイントになると思っています。

虐待をして、虐待を繰り返す人の人数は33%ぐらいと言われているのですね。残りの67%の人は虐待を繰り返していないと言われているのですが、その違いがどこかということ、やはり地域で支えてくれる人とか、誰か支えてくれた人が分岐点で、67%に行くか33%になるかと言われています。

そう考えると「夢や希望を信じて生き抜く人づくり」は、誰か周りで、地域で助けてくれる人とか、話を聞いてくれる人がいたら、きっとこのように信じていくことができるのではないかと思います。3歳までの母親への寄り添いサポートの具体的施策ができるとういと思っています。3歳までの子育て支援は、イコール母親支援だと思っているので、これが具体的な施策に生かされるとよいと思います。

ありがとうございます。

近藤区長

ありがとうございました。一通りコメントをいただきました。こうした基本的な大綱を具体化するための事業等については、また改めるとして、今回の教育大綱の案文の前文と、世代別理念の中の乳幼児期について、これはふさわしくない、削除するべきだ、またはこの文言についてもう少し膨らませた方がよい、この文面を入れたほうがよい、ここについてのコメントがないというような、この教育大綱の文章そのものについての何かご提案があれば、ここでいただければと思いますが、いかがでしょうか。

基本的な生活習慣を身につけるといってお話が出たかと思っています。それは基本的な生活習慣をしっかり身につけるといことは入っているわけですが、今のお話を伺うと、少し足りないところもあるのかなという気持ちもいたしますが.....。

それも含めて、教育委員の先生から、今の代表の方に対してご質問があればお願いしたいと思いますが.....。

では、小川清美先生、いかがでしょうか。

小川（清）委員

私は、幼児教育、保育を専門としておりますが、今、皆様からのお話、本当にお一人お一人そのとおりだと思います。それをどのようにこの教育大綱の中で現実に、実際にやっていけるようなものにするか。多分今ご意見はなかったのですが、この文章的には大丈夫なのかなとは思いますが、でも、これを実際に本当に実践していく、実行していくことは難しいこともありますね。

特に乳幼児期ですので、0歳から就学前、6歳までの子どもということになりますが、当然子どもだけではなくて、その子どもを育てる大人たちにまで関わるようなことで考えていく必要があるなど、本当に心から思いました。

質問は特にございません、本当に皆様、日々実践の中で感じていらっしゃることをお話しくさったと考えました。

以上です。

近藤区長

ありがとうございます。

小川正人先生、どうぞ。

小川（正）委員

私は学校教育を専門に研究しており、幼児教育はある意味では門外漢なのですが、素人の視点でいくつかお聞きしたいことがあります。1つは小規模保育室連絡会の岩崎さんのお話を聞いて、従来の制度では小規模保育室は非正規雇用の家庭の子どもを主に預かっている、それが足立区の一つの大きな特徴になっていてよかったと。それが新制度に変わって、そういうよさがなくなったということは、つまり小規模保育室の利用対象が、いわゆる一般家庭、つまり保育の選択ということで一般家庭にも広がったので、そういう非正規雇用というようなことだけに特化しない保育園になってしまったというようなことだと思うのですが、これをそういう従来のよさを生かしつつ、小規模保育室のよさを、いわゆる選択肢の広がった、いろいろな選択ができる保育というようなことで、そうした性格も維持しながら、なおかつ非正規とか、そのような層の保育要求にもきちっと対応できるようにするためには、小規模保育室に対するどういう支援とか見直しが必要でしょうかということが1つです。

もう1つは、これはちょっとどこの団体にお聞きしてよいのかわからないので、教えてほしいのですが、やはりいろいろな経済的な困窮を含めた、さまざまなハンデを背負った家庭に対する支援は、保育とか幼児教育だけではなくて、学校教育レベルでも今は非常に大きな課題になっています。

これまではどちらかというと、学校が家庭の中に介入するという点については、ある意味では抑えてきたのですが、やはりそれでは教育の貧困の連鎖を断ち切ることは難しいということで、もう少し積極的に家庭に入っていくということ、今、国レベルとしても大きな方向転換を図りつつあります。

例えばスクールソーシャルワーカーにおいても、国でも今1500名ぐらいしかいないのですが、今後5年で全国で少なくとも1万人ぐらいまで増やして、そうしたSSW、スクールソーシャルワーカーとかカウンセラーや学校の担当教員などで専門的なチームをつくって、その支援の質を高めていこうと、家庭支援の方向も、かなり積極的に介入するという方向で今変わり始めてきているのですね。

幼児教育とか保育園、幼稚園のレベルで、そういう家庭への支援をこれから強化しようとする際に、今何が一番求められていることなのでしょうか。

そして、恐らく先ほど児童委員の方からもお話があったように、いろいろな家庭訪問等々の取り組みはされていると思うのですが、今の取り組みをさらに強化して、そういう家庭への支援を強化していくために、今当面必要なものは何かをもう少し具体的に教えていただけないでしょうか。

近藤区長

以上2点でよろしいですか。

小川（正）委員

はい。

近藤区長

では、まず岩崎会長から、新制度の含みで、先ほどはコメントの中に、国の新制度に重要な理念のみ込まれてしまったというご表現をされておりましたが、その点も含めてご説明いただけますでしょうか。

岩崎会長

では、私から。簡単に言うと、やはりすみ分けがなくなってしまったことが大きいと思っております。昨年までは正社員の方、簡単に言うと1日8時間労働される方は、もう到底預かれない制度になっておりましたので、嫌でも小規模は利用できないというような中で、選択肢はそれほどなかったのですが、事実上もう強制的に利用ができないことになっておりましたので、そのすみ分けの部分がなくなってしまいました。

こんな話をする理由としては、たまたま協議会の中で、短時間保育の認定だけをしている保育園がありまして、ちょっとどうなるのかなと見守っておりましたら、やはり実際、もう現時点ではほとんど埋まっているというような状況の中で、恐らくそれを見て、まだまだ正社員にはなれていないのだけれども、やはり預けてお仕事をしていきたいという方は足立区には非常に多くいらっしゃるのかなというところで、新しい制度でよくはなっておるのですが、その部分の、今まで足立区が独自に手を差し伸べていたところに手が届いていないというようなところがあれば、何とか再度その部分に手が差し伸べられるところはないのかと思っております。

以上でございます。

近藤区長

そうですね、足立区の場合、パートタイム、短時間働いている方の保育への需要は非常に高いものですから、区としてもそういう方の受け皿として、すみません、言い方が悪いですが、小規模保育とか認証を考え、強化してきたということがありますので、区としても、こういう言い方はどうか、国からはしごを外されたような感じがございますね。

後段の各ご家庭への支援ということですが、例えば私たちの世代には家庭訪問がほぼ全員に実施されていたということで、今回も議会の質問の中に、家庭訪問をもう少し強化するべきではないかというご質問もございまして、ちょっと実態を説明していただいて、PTAの代表の方に、では、来られるほうも迷惑だという話も、今、実際問題はございまして、いろいろございしますが、その辺も含めて、まず実態を説明してください。

定野教育長

小学校、中学校でも、実際に家庭訪問に行っているというところは少なく、その中でも全学年

やっているところはもっと限られたところなのですね。

それでお話を伺ってみると、ご家庭の負担が多いので、なかなか訪問できない。要するに平日に行っても誰もいませんよということですし、また、私も経験がありますが、家庭訪問と言うと、あれこれと、掃除したりとか、いろいろあるではないですか。そういうところがあってなかなか行けないのだと。

本当に生活、仕事で大変だということもあるのでしょうけれども、その辺の理由でなかなか、それから一番問題なのは、どうしても訪問したい家に訪問できないということですね。どうぞいらっしゃいという家はもう全然問題がなくて、多分行かなくてもよいと思うのですが、実際に訪問したい家になかなか行けない。その辺がやはり難しいところなのかなと。

ただ、1点、やはりこれは全校で全学年実施しないと、私は「うちはいいよ」と言われて、そこだけ行かないというわけにはいかないと思っています。これは強く進めていくしかない。ただ、実態と大分乖離していることは間違いありません。

近藤区長

ご父兄の代表で、山口会長、いかがですか。

山口会長

私、実は幼稚園の子どもは今の時点でおりませんで、中学生と小学生の子どもがいるのですが、やはりうちも小学校、中学校ともに家庭訪問はありません。そのかわり個人面談があるので、私はそれに行っているんで、先生とのコミュニケーションはとれているとは思いますが、家庭訪問をやっても私は構わないと思うのですね。

そして、どちらでもよいと思うのですが、やはり先生とのコミュニケーションをとるということはすごく大事なことだと思うので、学校に行っている間、自分から目が離れている間にやっていることは、やはり先生でないといけないので、その連携をきちんとしておかないと。学校でどうしているかを把握できる方法であれば、私は必ずしも家庭訪問でなくてもよいかなとは思いますが。個人面談でも大丈夫だと思います。

でも中には、個人面談へは行きますが、保護者会に全然出席されないお母様方もいらっしゃいますし、やはりそういうコミュニケーションがとれていかないと、子ども同士でトラブルがあったときに、親がわからないで困ってしまうこともあるのですね。

やはりそういうときに授業参観とか、小まめに学校に行って親御さんの顔もわかるようになっていると、何か子ども同士でトラブルがあったときにも、やはり親同士でうまくコミュニケーションができて、大きなトラブルにならないのではないかなと思うのです。

なので、もちろん先生とのコミュニケーションで、親同士のコミュニケーションということで、なるべく自分が知らない間の子ども、学校へ行っている間とかの知らないところをどのように埋めていくかはすごく大事ではないかと考えます。

近藤区長

小川正人委員のご質問は別に家庭訪問に限ったことではないとは思いますが、例えば小宮委員長がグレーのご家庭を訪問することもあるとおっしゃっていました。そのようなときに、小学校であったり中学校のお子さんを抱えているご家庭の場合、どういう学校現場からの支援が足りなくて困っていらっしゃるのか、そのような実態について何かご存じでしたらお願いいたします。

小宮委員長

小川正人委員からお話をいただいた、本来であれば、うちでは小学校、中学校の対応のほうが件数的には多いのですが、今日は乳幼児期だということで、そっちに絞らせていただきました。

さっき私、ちょっと言葉が足りなかったと思いますが、健診でも来ないご家庭は、やはり数%いるんです。私は地元の保健総合センターへ行って、その話を詰めたときに、おおむね2%、区で100人ぐらいの子がなかなか健診に来てくれない。ならば主任児童委員の50人で2件ずつ一緒に回りますよと。保健師さんは大変親切な対応をしているけれども、失礼だけれども、3年、4年たったらご担当から外れますね。やはりそこで地域での見守りがいかに必要かお考えいただきたい。

私どもは特別職の地方公務員にもなりますので、守秘義務もちゃんとありますし、そういったところでの信頼をぜひいただいて、お任せいただくところは長い目でお任せいただきたいというようにお話をしました。

家庭訪問は、私たちは単独でするな、地域担当の児童委員さんがいらっしゃるから、その方と一緒に行くようにと。なかなか会ってもらえません。でも、2回ぐらい行って、ちょっと子育てのお手紙を置いてきますと、2回目に行くとき大体会ってくれていたりします。どこから話を聞いたのかなどということも当然言われるわけですが、そういうことではなくて、お母さん、お父さんも子育てで一番お困りになっているのはお宅ですよというふうな低いスタンスというのでしょうか、そういったところから、何とか人間関係をつくっていくというような心構えです。

学校からはいろいろなことを要請されます。現場へ行きますと、やはり学校の悪口をたくさん聞きます。でも、私たちはそういうスタンスに同調するのではなくて、一番大事なことは子育て、子どもがいかに健康に学校に行けるかですよというふうな形での入り方を心がけてするようにと、委員50人には言っています。

お答えになったかどうかですが.....。

近藤区長

ありがとうございます。伊藤部長、今、小川正人委員からはSSW、スクールソーシャルワーカーの活用についての話が出まして、まだ今年はモデル実施というか、わずか数人ですが、ちょっとそういった実態のご報告と、これからそのSSWの人たちを全校配置ということで増やしていく考え方がある中で、小宮委員長のような民生・児童委員の先生方との連携とか、そういう考えについて、これからの取り組みについて、区の考え方を担当部長としてよろしくお願いします。

伊藤子ども家庭部長

今年からSSWを3名導入いたしました。1名は、げんきのほうにいますが、2名を地域に配置して、モデル事業としてやっております。そのモデル地区だけではなくて、他の地域からのご相談も受けているということで、今回、スクールカウンセラーとの違いが、家庭にまで乗り込んでいって問題の解決に当たる。それから地域のさまざまな資源を有機的に結びつけながら問題の解決に当たるという、そのコーディネーター役を担ってきているというところでございます。

今手元に数字がなく申し訳ないのですが、相当な件数の相談がありまして、深刻さがうかがえるような状況でございます。この間、たしか青少年問題協議会のおきにも先生からお話がありましたように、主任児童委員さんとも連携をますます深めていって、問題の解決に努めたいと思っております。

今後、国の方針もありますが、できれば計画的に全区的な配置を考えていきたいと。そして学校をプラットフォームとした地域、家庭の問題解決のための一つの重要な役割を担わせていきたいと思っております。いかにせん今全国でこのスクールソーシャルワーカーは注目を集めてございまして、人材の確保が非常に大きな要素になってございます。最初から人材が、すばらしい方が来るとは限りませんので、私どもも育てながら課題を解決していく能力を高めていきたいと考えているところでございます。

定野教育長

非常に重要な示唆を幾つかいただいたのですが、1点だけ質問をいいですか。NPO法人の三浦代表からお話があった産後クライシス、0から2歳の間に離婚することが多いと。この期間は、やはり父親の理解がどのくらい進んでいるかで全然違うと思うのです。この辺は重要なことだと思っております。どうお思いでしょうか。

三浦代表理事

父親の支援が大切だと思います。昔と違って、今のお母様方は、やはり一緒に育てたいという気持ちがとても多いので、産後にパパの、夫の支援というか、そういうケアがないと、2人目をまず産みたくないと思う人がすごく増えてきています。なので、ここのサポートはすごく大事だと思っております。

定野教育長

ありがとうございます。そこをどうサポートされているのかをお聞きしたかったのですが……。

三浦代表理事

サポートですか。やはり父親学級とか父親ハンドブックなどがあると思うのですが、もう少し具体的に、本当に必要な内容が書かれていないと思っているので、そういうものを私もつくっていきたいとも思っています。

そういうものができると、もっと違うのかなということと、実際に今、産後、里帰りをしない人が増えてきているんです。その理由としては、お母さん、お父さんがお仕事をしているからというこ

とで、帰るのやめようかなとか言っていると、大体今の夫は、自分はちょっとイクメンかなと思っているので、「大丈夫だよ、帰らなくていいよ」というところで出産をすると、結局のところサポートはできないのが現状なので、「では、あなた、言っただけで、なんちゃってイクメンよ」ということです。「僕はごみを捨てているよ」と言うけれども、置いてあるごみを移動しているだけで、何曜日にこのごみを振り分けて捨てることとはすごく大きな差がある、今ママとパパの間でのギャップもあるのかなと思います。

あと、ちょっとさっきのお話ですが、今は私の小学校も家庭訪問はないのですが、やはり私は必要だなと思います。今までいろいろ、ホットラインを24時間365日しているので、やはり家に駆けつけなければいけない場面も何度もあって、例えば子育てサロンで見ているお母さんのお話と、実際に家に行ったときに読み取るものにもものすごいギャップを感じることはすごくたくさんあるので、その必要性と、一番大事なことが、産前、マタニティーのときからのサポート、家事支援を含めて、産前産後が一番必要だと思います。

近藤区長

ありがとうございました。時間も来ているのですが、川下会長と小宮委員長から同じように、保護者の子育てに対する無知とか、子育ての方法を知らない親御さんというコメントがございました。その辺を、では、誰がどのようにその子育ての知識を教えていくのかという役割とか、どの時期にそういう情報をきちっと伝えていくのか、非常に途方に暮れるわけです。

ということは、せんだって高校とか中学校の校長先生が来てくださったときに、子どもたちには親としての役割とか、親になって何をやるかということや学校では教えていないので、その辺を教わらないうちに親になってしまう子たちが圧倒的に多いというお話を伺っていたので、その延長線上で、今日子育てに対する無知というお言葉が非常に厳しく響いてきたわけなんです。

ですが、では、それは今始まったことなのか、かつては子育てに対する知識はどこかできちっと教わって親になったのかということも含めて、川下会長、何かございますでしょうか。

川下会長

私たちがいつも感じていることは、どこの時点でということではないのですが、社会の風潮が、子育ては大変だ、大変だというような形で一色になってしまっているのかなと思うのですね。今のお母さんたちも、子育てをして、楽しい場面がたくさんあるはずなのです。たくさんあるのに、何か大変だよ、大変だよというところがすごく強調され過ぎてしまっているのかなと思います。

まあ、大変というか、つらいということですよ。その大変なことはもちろん大変なのだけれども、いや、それは決してつらいとかいうことではなくて、やはり楽しいところにつながっていくのだよというような社会全体の考え方が当然必要になってくるのだらうと思います。

もちろん解決策にはならないのですが、ここはもう皆さんご承知のように、昔は地域でいろいろなお手伝いをしてくれる人がたくさんいたので、それを行政なりがかわることはとても難しいことだらうと思うのですが、まさに主任児童委員の先生がおっしゃったような、その地域がどのくらい

の手助けをできるか。それについては保護者の方が本当に目いっぱいどん底に落ちる前に、何か気軽にSOSを出せるような、もちろん雰囲気づくりも必要ではないかと思います。

近藤区長

ありがとうございました。時間もあれですが、何かございましたらご遠慮なくどうぞ。

三浦代表理事

すみません、今、子育ての無知と言っているのですが、子育ての情報はすごく知っているんです。それを選択する力がないことと、だから「私、このやり方は知っているわ、ちょっと試したけれども、だめだったからやめてしまったけれども、もう一回教えてくれる？」とか、「このやり方は具体的に知っているけれども、できないから、だっこの仕方を教えてください」と1カ月ぐらいで抱えてくるお母さんたちもたくさんいるんです。なので、具体的にどのように学ぶというか、そこが今大切だということが、産婦人科の人たちとのお話し合いとかでもよく出てくるんですね。

なので、やり方は知っている、情報も全部知っているけれども、できないということと、もう1つは、いっぱいいっぱいになってしまう理由として、「完璧な親なんていない」という講座を、げんきのほうでしているのですが、毎回必ず出てきて泣かれるお母さんたちの数人は、情報がたくさんあるというお話を私は何度もしているのですが、どのようにあるかと言ったら、何カ月になったらマグマグを使う、何カ月になったらストローを使う、何カ月になったら何々ということが小刻みに決まっているんですね。その情報があるから、それからちょっとでも外れると不安になっていくし、それをやらなくては私はお母さんとして失格だという思いになっていくから、それに追われていて、1歳過ぎた頃になると、「ああ、何だかわからないけど、楽しいも何もなくて、必死にこなしていました」と泣かれるお母さんたちが毎回たくさんいます。

そのところが、ちょっと何か「いいんだよ」という人が地域にもっとたくさんできたらすごく変わるかなといつも思っています。

近藤区長

ありがとうございました。

花岡委員

今日お聞きして、いろいろと示唆をいただきまして、ありがとうございました。というのは、マスコミで報道されていたことですが、文科省の問題行動調査の結果で、タイトルが「教師蹴る小1、通行人暴行」で、荒れる小学生、低学年を中心に件数が増加していると。その分析で、家庭環境が大きく影響していて、規範意識の乏しい子どもや、自分の感情を抑えられない子が増えている。そして、それは貧困などが原因で家庭のしつけが不十分、これが原因ではないかということが言われていました。

今日いろいろとお聞きして、悩みや不安の声を聞いてくれる人が地域にいれば、先ほどお話があったように6割、7割が救われるという話もありました。そういうことを考えると、やはり皆さん方が言われている連携ということは大事なことであり、手助けが大事なのかなと思います。特に保

育園、それから幼稚園、そして小学校、中学校、また、高校もそうですが、その連携を密にしていくことが大事だと思います。

それから家庭訪問の件ですが、小学校、中学校と言うよりは私は就学前の家庭訪問が大事だと思います。要するに、こちらから声を聞いていくという体制づくりがこれから課題になってくるといふ感じを持ちました。ありがとうございました。

近藤区長

どうもありがとうございました。足立区は、生まれてからでは遅いと、妊娠したそのときからのケアをしていく、ともに寄り添っていくということで、新年度に向かって新規事業を立ち上げておりますので、まさに妊娠からこちらでお世かけをしながらということが続けていきたいと思えます。

今日お話を受けましても、この大綱そのものよりも、これを実現するための具体的事業に何をぶら下げていくのが重要だということがよくよくわかりましたので、またこの下に足立区の事業の体系をつくって、皆さん方に見ていただいて、穴がないか、または組みかえできないかというようなご意見をしかるべきときに伺えればと思っております。

長時間大変お忙しいところ、ご参加いただきましてありがとうございました。

定野教育長

ありがとうございました。

中村政策経営課長

では、本日は長時間にわたりましての意見交換会、ありがとうございました。

2 成人期における関連団体における活動等について

中村政策経営課長

それでは、大変お待たせいたしました。ただいまより第5回の足立区総合教育会議の後半の議事を始めさせていただきたいと思えます。

まず議事の進行に先立ちまして、本会議の主宰者であります近藤区長より皆様にご挨拶させていただきます。

近藤区長

お忙しいところ、お集まりいただきましてまことにありがとうございます。もうご承知のとおり、国の制度が変わりまして、新しく区長が教育委員の皆様方とともに教育大綱を定めて、区の教育に関する方針を明らかにしていくということで、このたび初めて足立区としても教育大綱の策定に着手しているところでございます。

骨組み、あらあらのところが明らかになりましたので、今日はそれぞれのお立場の皆様方にお越しいただきまして、この本文の内容とか、これからそれにぶら下げる具体的な事業等についてご議論いただければと思えます。

本日は基本的に成人期の考え方についてご提言をいただければということではございますが、別に切り分けてそれに限るということでもございませんので、全体的に子ども支援、教育等についてお考えのところがあればコメントいただければと思います。

足立区の教育の将来を担っていく大きな指針ですので、ぜひ実のある討議ができますようにご協力をよろしくお願い申し上げます。ありがとうございました。

中村政策経営課長

それでは、最初に、会議の運営について私から説明させていただきます。本日の司会を務めております政策経営課長の中村でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

まず、本会議でございますが、公開を原則としておりまして、会議記録はホームページ等で公開させていただいております。そのため、会議録を作成する関係で、皆様のご発言を録音させていただいておりますので、ご了承ください。

次に、本日お配りしました資料について確認と簡単な説明をさせていただきます。

まず、席上に本日の次第をA4判1枚で置かせていただいております。

その後ろに本日出席いただいております会議の委員の名簿、それから関係団体の名簿をそれぞれ1部ずつ、また席次表についても、先ほど実施しました乳幼児期の部分を含めて置かせていただいております。

続いて、A3判の資料1、足立区教育大綱(案)と書いてございますペーパーをご覧くださいと思います。これがこれまで3回の総合教育会議で検討した現在の案でございます。左上に網かけの部分がございまして、この大綱の基本理念として「夢や希望を信じて生き抜く人づくり」と掲げてございます。

その下にはこの大綱の前文に当たる文章がありますが、小見出しを2つつけてございます。1つ目の「誰もが子どもを支える主役」という文章の中には「教育大綱とは」とか「教育の使命」などを記載した上、子どもたちを支えるために、家庭、学校、地域のみならず、社会全体で連携して子どもを支え、育て上げていく仕組みを記載させていただいております。

そしてもう1つ、2つ目の小見出しに「貧困の連鎖を断ち切る教育」とあります。これが足立区の教育大綱の中でもかなり特徴的な部分ですが、足立区のボトルネック的課題の一番根幹にあると考えていますものが貧困の問題でございます。それを断ち切る重要な役割として教育があるという認識のもとに、この教育大綱をつくらせていただいております。

そういったことを踏まえ、この中にも、厳しい環境にあるお子さんにも、そういった自立して生き抜く力を育むためのスタートラインに平等に立てるような、そういった環境づくりということも記載させていただいております。

また、右側には世代別の理念、乳幼児期、青少年期、成人期とそれぞれのステージごとに理念を掲げてございます。本日も議論いただきたいものが一番下の成人期でございます。

この成人期では「自ら学ぶとともに、その経験を社会に還元する意欲を育てる」ということで、も

ちろん社会的にも経済的にも自立する時期ではございますが、学びというものを継続して意欲的に取り組んでいただきながら、ゆくゆくはその地域社会などにご自身の学びの成果、経験などを還元していただくといった役割を担っていただきたいということを込めて理念をつくらせていただいております。

そしてもう1枚、資料2の「理念の実現に向けた施策(案)」も、3つのそれぞれのライフステージごとに施策の柱を案として設けております。こういったものに対するご意見も含めて、本日、教育大綱の理念に皆様からご意見を賜われればありがたく存じます。

そして資料3は、今後の総合教育会議の事務日程、また、本日資料をご提供いただいておりますが、「日本の若者の現状」というパワーポイントの資料、それから第3回の総合教育会議の議事録もご用意しておりますので、ご参考にご覧いただければありがたく存じます。

それでは、これより議事に入りますが、初めに本日の出席者のご紹介をさせていただきます。

近藤やよい足立区長は今、他の公務で中座いたしております。

続きまして、定野司教育長です。

定野教育長

定野です。よろしくお願いいたします。

中村政策経営課長

小川正人教育委員です。

小川(正)委員

小川です。よろしくお願いいたします。

中村政策経営課長

桑原勉教育委員です。

桑原委員

桑原です。よろしくお願いいたします。

中村政策経営課長

花岡恵三教育委員です。

花岡委員

花岡です。よろしくお願いいたします。

中村政策経営課長

小川清美教育委員です。

小川(清)委員

よろしくお願いいたします。

中村政策経営課長

続きまして、本日ご出席いただいております皆様をご紹介させていただきます。

まず、中央本町地域学習センター所長、杉本貴志様です。

杉本所長

杉本です。よろしくお願ひします。

中村政策経営課長

東京未来大学福祉保育専門学校副校長、小川孝裕様です。

小川副校長

小川です。よろしくお願ひします。

中村政策経営課長

あだち異業種交流会未来クラブ会長、丸山寛治様です。

丸山会長

丸山です。よろしくお願ひします。

中村政策経営課長

公益財団法人足立区体育協会会長、中田裕康様です。

中田会長

中田でございます。よろしくお願ひいたします。

中村政策経営課長

足立区スポーツ推進委員会会長、羽住敏久様です。

羽住会長

羽住です。よろしくお願ひします。

中村政策経営課長

足立区青少年委員会会長、北島一弘様です。

北島会長

北島です。よろしくお願ひします。

中村政策経営課長

ご紹介は以上でございます。今後の議事については教育長にお任せいたしたいと思ひます。

定野教育長

皆さん、本当に長時間お待たせして申しわけございません。それでは、暫時私のほうで議事を進行させていただきたいと思ひます。今日は6名でいらっしゃいますので、大変恐縮ですが、1人4、5分でまとめていただけると助かります。

それでは、初めに中央本町地域学習センター、杉本所長からご意見をお願ひいたします。

杉本所長

杉本でございます。着席したままで失礼します。

中央本町地域学習センターの具体的な取り組みの中で、まず子どもたちの学習センターでの活動等を少しご紹介したいと思っております。

学習センターの中では、学校終わりも、夏休みも多くの子どもたちが利用しております。ただ、そ

れが図書館や体育館や学習室といった決められた施設というよりは、中央本町地域学習センターの場合は、ロビーやフリースペースや、またセンターの敷地内などで子どもたちが自主的に集まって、グループで友達同士で勉強したり遊びをしたりという目的で来館されることが今多くなっていると感じております。

それも、私どもは指定管理者として行っている中で、小さな取り組みの一つとして、そういった環境で異世代交流が学習センターの中で子どもたちにとってよいことであれば、続けていきたいと思いつながり今取り組んでいるところでございます。

ただ、その中でも私どもでできることとして、例えば使ったものの整頓であったり、飲食をした後のごみの持ち帰りだとか、また、中には学習センターのロビーでコンセント、電源をとってゲーム機を使って遊ぶ子どもたちもいるのです。そういったところには、当然職員である私たちが挨拶や礼儀、あとは公共の場の意味をわかってもらうための教育的な声かけをしたりしています。

また、成人期ですが、若年層から現役の世代の皆様にも、どうしたら学習センターで学びの場を持っていただけるかという取り組みについてですが、多くは、当然区役所でも多く開催されているような講座、いわゆる教室を開催しております。わかりやすいところと言うと中国語や韓国語や英語の語学とか、あとは土日祝日などにはお子様と一緒に親子で参加できるような体験講座を館内、館外問わず広く開催しております。

そういう目的では、やはり現役世代に絞ってアプローチを続けていかないと、学習センターの認知度や利用者のある程度の年齢を下げていくことが難しいのではないかという思いから、そのような講座に絞っております。

それでも講座以外では利用したことがない方も当然多くいらっしゃると思いますし、そういった中で、今回の教育大綱の目的にあるような、自主的な学びから地域に還元するといったところまで、ボランティア活動など、なかなか利用者の皆様には、私どもから何か啓発のお声かけをしたとしても、「まだ私たちにはちょっと」というところで、自主的な学びの場から、なかなかその地域、館外に出るところまでは行っていないのが現状でございます。

そういった少ない中でも、足立区の介護施設とか老人ホーム等から、ボランティアセンターのような場所から私どもの地域学習センターまで、できればサークルを私どものレクリエーションやイベントに参加してほしいというご依頼を受けるようになっておりますので、今まさに子どもから、今申し上げた地域への還元の大人、現役世代までを何とか多く、学習センターを経由して地域に広げていきたいと思っております。

簡単ではございますが、以上です。

定野教育長

ありがとうございました。何かご質問があれば挙手をお願いしたいと思いますが、よろしいですか。

私から1つだけ。特に今回の教育大綱は成人期の方が乳幼児期とか青少年期の方にどれだけ還元

できるのかということで、さっきちょっと触れられましたが、今啓発してもなかなかそこまで達していないと。何が不足しているとお思いでしょうか。時間ですか。何を待ってればよいか、あるいは何かアクションを起こさなければいけないのであれば、何が足りないのかちょっとお聞きしたかったんです。

杉本所長

私も背中を押すようにはしているのですが、意外に皆さん、気恥ずかしいというか。

定野教育長

謙虚だということですか。

杉本所長

そうですね。

定野教育長

よくわかりました。また後で議論したいと思いますので、よろしくお願いします。

では、ご質問がないようですので、続いて東京未来大学福祉保育専門学校の副校長、小川さんからお願いします。

小川副校長

小川でございます。私自身は平成18年の東京未来大学開学前からこの3月まで、大学のほうでも勤めておりまして、現在は綾瀬にある専門学校で勤めております。

働く前の最後の場所と言うのでしょうか、学生時代最後で、この先の人生のステップは働くというところですので、そこを育成する学生に対してさまざまなことを行っています。

入学する段階で、主体的な学生と、そうでない学生の差が非常に激しいと思います。それは入試制度などもあって、AOで入れることと、筆記試験などを通してある程度一定の水準を通った者でないと入学できないという大学のシステム上、比較的入りやすい学生と、勉強して頑張ってくる学生と、入ってきた中で、いろいろな層があります。

今年、専門学校にいて非常に思うことは、母子家庭も多く、金銭的にも大変厳しい学生が多いということで、割合を調べてみたのですが、東京未来大学の場合は、今1194人在籍しているのですが、そのうちの大体10%が足立区在住です。そして、今の綾瀬にある専門学校は87人の総数ですが、22名で25%ということで、地元率が非常に高い。隣の葛飾区から通ってくる学生もいるのですが、母子家庭が多く、お金に非常に厳しくて、奨学金を借りているという学生が多いということは実感値としてあります。

そこで、今日は簡単に資料だけをつくってきたのですが、お手元の「日本の若者の現状」ということで、これから小学校、中学校でもアクティブラーニングが取り入れられてくるということで、その検討をしたときの材料を資料として載せています。

細かく言うと時間がないので割愛しますが、簡単に言うと、自己肯定感があまりなくて、自己否定する高校生の現状があります。これは日本と中国とアメリカと韓国を比較した4年ぐらい前のデ

ータです。

それを見た後に、社会が求める人材と大学教育でやっている内容にギャップが生じていて、要は七五三現象と言われるような、3割の大学卒業生が3年以内にやめてしまうというものになります。なので、採用側が期待するものと、求められる人材はちょっと違うというデータを証明しているところ です。

なので、こういうことではいけない、大学も変わらなければいけないということで、人を育てるには、社会にマッチした人材育成をしていかなければいけない、それに合った部分が必要なので、足立区と法人全体でもやっていると思いますが、地元の幼稚園、保育園、小学校へのボランティアとか、そういうところでのお手伝いといいますか、地域に還元できるようなことをやっております。

これからアクティブラーニングがどんどん増えていくのですが、要は主体的に能動的な授業をしていこう、大学では一方通行でなく双方向的な取り組みをしていくことも必要だということで、今かなり力を入れています。それから専門学校でも、当法人は全国に専門学校が51あるので、統一して今やっているところであります。

最後に「教室はまちがうところだ」という資料があるのですが、これは数十年前に小学校現場の先生がやっていた絵本になっているので、見てみると非常におもしろいものなのですが、学校現場とはどのようなものか。大学と専門学校とか、高等教育機関では違いますが、小さいうちは間違ってもよいからどんどん発言して、失敗してもよいから失敗から学ぶというところの経験をどんどんしていくと、今大学生は、非常に挑戦していく学生もいますが、そうでない学生も結構います。それは大学全入ということで、大学、それから学部を選ばなければ誰でも入れるような世の中になってきていますので、そうではなくて、自分が行きたい、学びたい、今後の子どもが好きとか、お年寄りが好きとか、何か目的意識を持った学生が育ってくれたらいいなと思っています。

今のこの資料の前のページに「これからの大学は」とありますが、これは文部科学省で大学改革実行プランというものが出たのですが、そのときに求められる人材像としては、簡単に言うと大きくグローバル化、研究に力を入れる大学、それから地域の活性化、ここに取り組めるような学校を求めて大学改革をしましょうということで2012年に出たものですので、その流れで今このような、世の中、大学教育というものは結構変わってきているということだけはちょっとお伝えできればと思います、資料だけご準備させていただきました。

以上でございます。

定野教育長

ありがとうございました。何かご質問があれば、いかがでしょうか。

資料までつくっていただいてありがとうございます。この「日本の若者の現状」の最初のグラフはいつも拝見するのですが、日本と外国を比べると、自己肯定感、効力感が低いというのですが、これは、ただ日本人が謙虚だからだということではないのですか。

小川副校長

おっしゃるとおり、その文化的なものはあると思います。なので控え目につけているということはあると思います。

定野教育長

そうですね。ちょっと言いたかったのですが、すみません。ありがとうございます。他にはよろしいでしょうか。

なければ、あだち異業種交流会未来クラブの丸山会長、ひとつお願いします。

丸山会長

丸山です。よろしく申し上げます。

私は未来クラブの会長ということで、もうこの10年ほど会長を務めさせていただいているのですが、もともとこの未来クラブはどういうことで集まっているかといいますと、最初は産業振興課の工業系の方々の面倒をいただいて立ち上がった交流会なのですね。

未来クラブは、どちらかというところ、とにかく集まった者同士で足立という地域を活性化させようということで、それも、ものづくりで活性化しようということで集まったというか、そのようなクラブで、他にも連絡協議会として4団体あるのですが、特徴的なことは、未来クラブは年々膨張していて、参加する企業がどんどん増えて、当初は20社足らずだったところが、今は52社にまで発展しているのですね。

入ってくると、景気がよい、悪いにかかわらず、皆それなりに元気になる企業が多いのです。それはなぜかといいますと、やはりそれぞれの企業が、とにかく自分のところの強みをもってものをつくっていかうということで、実際には足立区には、足立ブランドというものをご存じない方もおられるかも知れないのですが、足立ブランドというブランド認定事業が始まって、また、TASKものづくりプロジェクトと言って、台東、荒川、足立、墨田、葛飾の5区でプロジェクトを組んでいて、そこで年に1回ものづくり大賞を催していて、それに足立区からも参加して6年ですが、このところ例年、足立区のものづくりが一番活発に入選して、入選すると足立ブランド認定事業もそうですが、ビッグサイトの国際会議場で年に何回かイベントがあるのですが、それに無償で出られるということで、日本国内はもちろんですが、国内外に自分たちのつくったものをアピールできるという機会がだんだん増えてきています。

区内においても、ものづくりフェスタはA - Festa と同時にずっと行われていますが、それと違って数年前からあだちメッセというものも立ち上がりまして、このあだちメッセで、これも内外の人とBツーBとかBツーCのいわゆる交流というか、ものの受発注などができるような環境がどんどん整ってきているのですね。

ですから、足立区のものづくりは結構それなりに全国に知れ渡っている部分もありまして、何か先ほど来聞いていると、ちょっと私らと取り組み方が違うのかなと思うのですが、とにかく最近の足立区は、北千住などは特に若い人の人気の住みたいまちだなどということになってきたり、けさ

も足立区の実力などと言ってNHKでいろいろ放送をしたり、何かと最近メディアに取り上げられることが多くなりました。

私自身も「ゆうゆう散歩」だとか「ぶらり途中下車の旅」で紹介されて、お客さんが全国から来るという現実がありました。それと最近もう、あだちメッセと言ったものを産業政策課のほうで催していただいて、そういうところに皆参加することで、世の中の人に自分のものづくりをアピールできるということは非常にうれしいことで、これがすぐにまた業績へもはね返ってくる事業なので、我々としたら、区のそういったいろいろな応援というか助成その他が非常にありがたく、それが足立区のものづくりを活性化させているのではないかと思います。

おかげさまで私が言うのはおかしいのですが、都内で事業所数は、もう足立区が23区で2位になったのです。まあ、大田区はもともと9000社ぐらいあったものが3000社ぐらいに減ったので、そこからいくと足立区のほうが廃業が少ないというか、それと中小企業支援課あたりの支援もあって、東京電機大学が北千住にできてから、電機大学なども同じように起業家を育てるようなことで活動して、そういった若い企業も生まれ出ているということで、このところの足立区は非常にすばらしい動きをしています。私は特に個人的には足立生まれで足立育ちですから、足立区を非常に誇りに思って生きています。それと全国から中学生が修学旅行でわざわざ足立ブランドの企業を見学に来てくれるというようなこともあります。

それと、区内の中学生も、インターンシップをはじめ、私のところにも何校か、いろいろな中学校がものづくりを見にくるというか、私らの子どもの頃は近所でいろいろな仕事をしている場面が見られたのですが、今の子どもたちには、どこの会社が何をつくっているか、ものはどうやってつくられているのかもほとんどわからない子どもに育ってしまっているもので、そういった意味で中学生がそのように我々のところへ来て、ものづくりのおもしろさとか、そのようなものを私らは一生懸命、足立区の将来のものづくりとなるべく、何とか育てたいと思ひまして、ものづくりの楽しさをいつも子どもらには話しています。

きのうも足立区生物園で、私のところではワークショップということで、太陽光で判こをつくるうなどということでやりました。子どもたちは非常に喜びまして、自分で判こをつくるということがこんなに楽しいのかと、親御さんとともに楽しんでいただいたり、今度は足立ものづくりフェスタでも同じようなイベントをするつもりですが、そのように折に触れて、区の子どもたちにもづくりを体験させるとか、これからはそういうことがますます必要ではないかと思っています。

こんなところでお話を終わらせていただきます。よろしく。

定野教育長

ありがとうございました。まさに今の皆さんの知見を子どもたちや地域に還元している好例だと思うのですが、何かご質問があれば、いかがでしょうか、よろしいですか。ありましたら後でまたご質問していただければと思います。

では、続きまして公益財団法人足立区体育協会の中田会長、よろしく申し上げます。

中田会長

体育協会の中田でございます。よろしくお願いたします。

体育協会は3年前に一般財団法人から公益財団法人に変更させていただきました。現在の足立区体育協会は37競技団体、2150クラブ、4万8千人が活躍しております。

公益財団法人足立区体育教会は、加盟団体とともに公益事業の柱である区民大会をはじめ、足立区における体育・スポーツ・レクリエーションの振興を図り、活力ある地域社会、健康寿命と地域の絆づくりに貢献していくということを目的に活動しております。

今回、ラグビーワールドカップで日本が歴史的勝利を挙げ、日本中がラグビーの話題で盛り上がりました。その2週間くらい前にはバレーボールのワールドカップ大会が日本で開かれ、新しくネクスト4といわれるイケメンの若手選手が活躍し、女性ファンの人気になっています。テニスでは、錦織選手が活躍しているので、テニスをしてみたいという子どもたちが増えています。

一時は子どもたちの間に「スポーツをやると疲れるから嫌だ。」というような時代もありましたが、最近、新入生のテニス部の説明会にも子どもたちが集まるようになってきたと聞いています。大人の間にも10年ぶり、15年ぶりでテニスをやってみたい、バレーをやりたいというような人も出てきました。こういう機会をとらえて、地域社会の活性化につなげていきたいと思っております。

体育協会は公益化したので、体協加盟の競技団体ではなくて、一般区民、子どもたちをどう巻き込んで活性化していくか、今そういうことに努力しています。

例えば、中学や高校の部活の顧問が足りなくなれば、競技団体から指導者を派遣して部活を活性化させる。すでにいくつかのところでは始まっています。

また、次の世代へつなげていくという大きな問題があると思うのですが、野球、サッカー、テニス、バレーボールのように1つの競技団体の中にシニアからジュニアまで幅広い年齢層で構成されている競技団体においては、その競技団体の中において世代間の交流を図ったり、技術や組織の継承をしたり、結果的に人づくりまで行っています。

体育協会の事業に「スポーツ広場」というものがあります。好きなスポーツを選んで、大人も子ども自分の都合に合わせてその場所に来れば、そのスポーツができるというものです。また、広く広報で区民の参加者を募り、比較的安い金額で継続的に講習会に参加できる「スポーツ教室」という制度もあります。これらは、スポーツを教えるだけでなく、「人づくり」ということも念頭に入れています。「挨拶、お早うございます。」「報告、これで帰ります。」「感謝、ありがとうございました。」このようなことも「スポーツ広場」や「講習会」で意識付けしています。

強制してやらせるのではなく、楽しんでいる間に自然にできるようにさせていくのも、指導者の務めだと指導しています。

スポーツの力のはかり知れないものがありますので、スポーツを通して、「区民の孤立化防止」や「子どもたちの健全な育成」につなげていきたいと思っております。

定野教育長

ありがとうございました。ご質問はよろしいですか。

よろしければ、続いて足立区スポーツ推進委員会の羽住会長、お願いします。

羽住会長

スポーツ推進委員は、スポーツ基本法に基づいて、生涯スポーツ活動の普及・推進、健康維持・増進、区民の豊かな生活に寄与するために、区内 25 の青少年対策地区委員会から推薦を受けて、現在 79 名で活動しております。

私たちは社会的背景やスポーツの持つ特性、意義を十分に踏まえて、総合型地域クラブの育成・支援、“健康”体力測定の全区展開を進めております。また、子どもの体力向上に向けた事業展開、「放課後子ども教室」の支援、学校開放事業の運営など、地域に根ざした生涯スポーツ活動を活性化させ、区民の健康体力づくり、活力に満ちた住みよい地域社会づくりに取り組んでおります。

我々の活動は、子どもから高齢者まで、さらに障がい者まで、全ての年齢層を対象としておりますが、今回は、成人期ということで、成人を対象とした取り組みに関しては、基本的に親子と一緒に活動できる事業を挙げてみたいと思っております。

毎年、体育の日に行われる「スポーツカーニバル」は、足立区・足立区体育協会・スポーツ推進委員会・指定管理者の 4 者共催で足立区での生涯スポーツの一大イベントになっております。総合スポーツセンターをはじめ、各地域の体育館で開催しており、親子で、各種スポーツが体験できる場を用意しております。

また、いつでも・どこでも・誰もが気軽にプレーできるニュースポーツを考案、普及しております。

“健康”体力測定では、親子で体力測定を実施して、ご自身の体力年齢を判定し、スポーツや体力づくりについてのアドバイスをしております。

学校開放の関係では、昨年、1515 の登録団体・延べ 128 万強の人が活動されておりましたが、区内全小・中学校 106 校の施設管理運営委員会の会長として、施設利用調整と利用団体からの要望を行政につなげております。

最後になりますが、総合型地域クラブは足立区に 9 つあります。これらの運営サポートとして、スポーツ推進委員が携わっております。昨年、9 つのクラブの横連携を目的に、「足立区総合型地域クラブ連絡会」を発足させております。

今後、スポーツ推進委員として、地区対・地少協において、子どもの未来のために、地域の支え手として活躍できる大人の発掘なども進めていきたいと思っております。

以上でございます。

定野教育長

ありがとうございました。ご意見、ご質問、よろしいでしょうか。

それでは、大変遅くなって最後になってしまいましたが、申しわけありません。足立区青少年委

員会の北島会長、よろしくお願いします。

北島会長

青少年委員会の北島です。よろしくお願いします。

青少年委員は、ご存じのように足立区立の小学校、中学校に各1名、その学区より選ばれて、委嘱を受けて活動しております。その関係で小学校69校、中学校37校、計106校ですので、青少年委員は今106名となりまして、地区対の推薦で委員の委嘱を行っております。

地域にはさまざまな団体があります。我々の推薦母体である地区対は足立区に24、それから少連協、地少協さん、それ以外に総合型が9つ、また住区センターは今48でしたよね。それから各町会がありということで、青少年委員は学校が主体で、健全育成を旨に活動しているのですが、どうしても地区対の役員、それから町会の役員、地少協はもちろんのこと、総合型から住区センターから、いろいろな役を引き受けて、ない時間を引きずり出しながら活動をしています。

何が困ると言って、私がいつも感じることは、この縛りが各団体によって違う。それ以外に、例えば我々青少年委員会は13ブロック、足立区を13に分けて活動しているのですが、これは小P連と同じ13ブロックに分かれておりますが、小P連は小学校だけですが、我々のブロックの中には中学校も入ってきますので、世帯は多くなります。

そのように一つ一つの枠組みが違う関係で、1つのブロックの中に地区対が二つ、三つ入っていたり、またその地区対が隣のブロックまで区域であったりということになると、そのブロックで選ばれた青少年委員が非常に働きにくい場面に出くわします。

また、あっちの地区対、こっちの地区対と活動の場が広がっていくと、当然自分のブロックから足を出して活動する方もたくさん見受けられます。こういった枠組みを整理していただきたいということは前からお願いしているところですが、何とかならないかと思っております。

最後になりますが、ちょうど五、六年前から我々も就労支援委員会のほうに委員として参加させていただいているのですが、高1の退学の実態とか、足立区の就労支援の問題とかも、我々は小中学生だけ扱っていればよいということではなく、高校またそれよりも大学ということで、全体の学力も含めたことを学んでいかないと、なかなか子どもに対応できないと思っております。

今日は成人期のほうのグループということですが、健全育成をベースにしている青少年委員会としては、そこを見据えながら、何か協力できる点があれば大いに協力したいと思っております。

以上です。

定野教育長

ありがとうございました。他に、ご質問、ご意見、いかがでしょうか。特に、よろしければ教育大綱のことについて少し触れていただいたところもあります。そうしたところでもご意見をいただければと思います、いかがでしょうか。

丸山会長

体育関係というかスポーツ関係で、足立区の子どもたちが物すごく活躍していて、たしか中学校

の駅伝は非常に強いと思うのですね。なぜそういうことを私が知っているかといいますと、私のところでその参加する選手の着るブルゾンなどに印刷をしているので、やはり結果を気にして見ていると、とにかく都内でも1番、2番というような好成績で、これがどうももう一つ区民みんなに知れ渡っていないのではないかという、そこがちょっと寂しいなと思っております。

むしろ、そういうマラソン大会に出た子にしたら、それは人生の中でも大変な記念になるイベントで、思い出に残るものとして、もっとバックアップしてやってもよいのではないかなと思ったり、これは門外漢からの意見ですが、そういう何かそれだけ足立区の子が頑張っているところを、非常に喜んでいる一人として、何とかもう少し大きく報道するとか、何かそういうことができないかなと思ったりしているのです。

定野教育長

広報には、たしか前回2位になったのかな、あれも宣伝されていますし、いろいろなところで取り上げられていますし、今、駅伝のお話がありましたが、駅伝だけではなくて、全国大会に出るような子どもたちもいます。それはもう教育だよりなどでもお知らせしているところで、なかなか目にとまらないのであれば、私どもの宣伝が少し足りないので、さらに強化していきたいと思います。

他にいかがでしょうか。特に今、スポーツの話がたくさん出たので、今回の教育大綱に、確かに生活習慣はあるのですが、体力はないということは、ちょっと私、前回は申し上げたのですが、それを入れてもよいかなと。どこに入れるかは、またご議論があると思いますが、そこはちょっと今感じたところです。

スポーツを通じてということは、2020年の東京オリンピックもありますし、そういったところを目指して体、心の健全な育成を目指すということも1つありだと思っています。

他、いかがでしょうか。

中田会長

秋になると、あちらでもこちらでも運動会が始まりますが、昔は運動会になると「人気者」になる子がいました。ふだん、教室では目立たないけれど、運動会になるとみんなの人気者になる子どもがいたのですが、私はこういう子どもがいてもいいと思うのです。

現在、体育協会は、大人が中心なのですが、できれば中体連や高体連とも連携していきたいと思っています。先ほど丸山会長からお話が出た中学生が駅伝大会で活躍しているということも体育協会は把握していません。できれば、そういう情報も共有して、スポーツを通して、ジュニアから成人、シニアまで継続した組織になれば、その中でスポーツの好きな子どもを育て、やる気や自信や能力を引き出し、結果的には組織全体のレベルアップも図れると思います。

私は、この6月に体育協会の会長になったばかりですが、定野教育長にもご相談しながら、子どもたちをスポーツの力でどのように成長させられるか、頑張りたいと思います。

定野教育長

ありがとうございます。教育大綱のこの成人期の最後のところに「生きがいを持ち、意欲的に学

び続ける」とあるのですが、これは大人の話をしているわけですが、そういう指導者が子どもたちの未来のために支えていただくということがこの教育大綱の成人期の趣旨ですので、ぜひそういった方向を具体化する何かをまたつくっていきたいと思っておりますので、よろしくお願いします。

他、いかがでしょうか。

小川副校長

2つあります。1つは学びというところですが、最近の大学とか専門学校へ入っている高校生の動向ですが、今は高校1年から大学進学とか専門学校を見て、今、高校に報告するというような流れになっています。保護者も一緒についてくるケースが非常に多くて、この夏も高校1年生から、もう入ったばかりの高校生が大学とか専門学校を見学に来ます。しかも保護者つきで、大体保護者の参加率は3割から4割来ています。ですので高校からそういう指導があるのですが、できれば、今もやっていらっしゃると思うのですが、中学生ぐらいからもうちょっとある程度やっておくとよいのかなと思っています。

理由は1つあるのですが、高校生になってから、宿題のていで行きなさいと言われるところが多いのですが、中学生ぐらいから目標とか、こんな仕事につきたいという何か夢などを持ってもらったら将来の学びにつながるのかなということを今思っているところです。

中学生は今でもいろいろな体験をされていると思うのですが、もうちょっと枠を広げてもよいのかなという、その学びの部分は1つです。

もう1つは就学資金に関することです。お金なのですが、流山市では、流山にある学校に通い、流山にあるところに何年間か勤めると、お金を返さなくてよいという制度があります。要するに流山から出ないような方策をとっています。

足立区には幸い大学や専門学校、特に大学なども増えてきて、これからも増えると思いますので、そのような仕組みができればよいなと思いました。

センターの教育委員会のほうに伺ったら、そういう制度は出てきているという話も伺ったのですが、実は、ちょっと時期があまりよくないと感じています。入学前に就学資金の申請をして、確定するのは、大体前半戦で5月か6月に締め切りがあって決まってくるという話なのですが、進学先が決まっていなくても、お金を貸し出すという仕組みは、ちょっとまだ現実、受けとめる側としてはあまり成り立たないのではないかなと思っています。

ですので、簡単に言うと、入学する学生は、入学金とか教科書代などは、実は3月までにお金が必要なのですが、それが払えないので辞退してしまうとか、やはりやめたとか、働いてしまおうというふうに流れていってしまうので、ぎりぎりになるとよいなと思います。そんな制度が足立区にあって、足立区で国家資格系の資格を取れるような学校に行って、そこを卒業して、足立区で働いて還元できるという仕組みが、もうちょっと柔軟性を持った制度があればよかったらよいなということが思ったところです。

以上、学びと就学資金、2点です。

定野教育長

ありがとうございます。給付型の奨学金は検討もしていますが、なかなか財政面で難しいところがあると。何かそれにかわる方法はないかということは考えていますし、あと使いやすい制度ということであれば、今まで年1回だったものを年2回に締め切りを分けて、それで3月に間に合うような給付をしようということで、これは実現しています。

また、大学生の経験、体験ということもやっているのですが、まだまだ全部の子どもたちが体験しているかという、そうではなくて、一部の理解のある保護者は体験をさせているけれども、実はそうでないところにまで手は届いていないということが実情だと思います。貴重なご意見ありがとうございます。

他、いかがでしょうか。

北島会長

ボトムアップを考えた場合に、学力でもスポーツでも、私は自己肯定感に結びつくのであればよいと思っていますが、私のところ、千住では平成14年から検定教室を1ブロックだけで行っておりまして、数検、漢検のテストを年に2回行っているのですが、本当にできる子は小学生でも、もう既に中3のレベルに達している子がたくさんいます。

ですから、これは底辺を上げるからこそこういう子ができるのですが、先ほどのスポーツの話ではないですが、できたら、このできる子をもっと褒めるシステム、仕組みとか、もっと伸ばす仕組み、それこそ「足立区でノーベル賞は何人いるんだよ」ぐらいの話まで大きく膨らませてよいので、そういったことも考えていただければと思っております。

以上です。

定野教育長

ありがとうございました。

他、いかがでしょうか。

中田会長

先ほど丸山会長から、足立区の中学校のスポーツがなかなか立派だという話が出ましたが、この中学校のスポーツを活性化させるためには、小学校も活性化させていかなければならない。これは我々体育協会としてもこれから力を入れたいと思っているのですが、例えば小学生を対象にした大会は今までやってこなかったのですが、こういうものをすることによって中学校のレベルが上がり、そして高校のレベルが上がる。そして押しなべて成人までそれを波及させていく、そういうことが必要ではないかと思っております。そんなことで総合的に力を入れていくことが非常に大切ではないか、そのように思っております。

定野教育長

ありがとうございました。

他、いかがでしょうか。よろしければ教育委員の中から1人、ごめんなさい、1人と縛ってしまっ

てすみません、どなたか。

小川（正）委員

今日、NHKの朝8時15分から「あさイチ」という放送番組があって、そこで足立区の特集をやっています。足立区内の非常にすぐれた産業とか、足立市場などの流通などの紹介を特集で放送されていました。私は改めて足立区のいろいろなよさを再確認したのですが、今日地域学習センターの杉本さんと、未来大学の小川先生と、異業種交流会未来クラブの丸山さんの、それぞれのお話が、それぞれとしては非常に素晴らしいのですが、これはまだ一体として何か取り組むようなプログラムはないのかなということ、聞きながら感じていました。

というのは、先ほど小川先生からお話があったように、これから恐らく大学だけではなくて、小中学校などにおいても、いわゆるアクティブラーニングというような学びが非常に重要視されてくると思っています。つまり具体的な問題と、やはり課題の解決に向けた学習を進めていく。こうしたアクティブラーニングの取り組みを小中学校でやろうとした場合には、恐らく地域の具体的な問題とか素材とか足立区をフィールドに使ったような学習がこれまで以上に求められてくると思うのです。

そうなったときには、センターでやっているいろいろな体験学習とか、異業種でやっているような取り組みがもう少し一体的に、人的にも物理的にもまとめられて、そうした小中学校のアクティブラーニングに資するような、いろいろな学習プログラムとか体験学習プログラムを効率的に学校側に提供したり、また、そうしたアクティブラーニングをするために、学校とそういういろいろな地域の素材をコーディネートするような指導者を育成するとか、そういうことを少し足立区としても計画的に育てていかないと、恐らく小中学校のアクティブラーニング等の新しい試みは、学校の教師だけではできないと思っていますので、そういう取り組みはできないのかなと、3人のお話を聞きながら感じていたのです。まだそういう区内のいろいろな団体の取り組みを一つにするような動きとか取り組みはあまりないのでしょうか。

近藤区長

それはお三方に質問されても酷なことだと思うのです。それぞれをやる気も力もおありになって、やはりそれをコーディネートしなければならないのは、まさに区であったり、教育委員会であったりだと思います。

徐々に単発的な事業は始まっています。例えば私は1つ、夏休みになってから参画させていただいたものは、感想文の書き方教室というものもあって、課題図書はどうやって選ぶかとか、そういった学校現場とのコラボでの事業があったり、あともものづくりもありますが、それが、例えば学校のほうから、こういう力をつけさせたいので、こういうプログラムを考えてくれないかとか、そういったところまでは、まだきちっと精緻な連携ができているとは言えない状況なのですが、私たちのほうから問題意識を投げかけると、事業提案をしていただけるといような状況ではございますので、それをもう少しシステムチックにやっていけば、小川正人委員がおっしゃってくださったよ

うな形ができ上がってくるのだらうと思いますが、徐々に小学校から手をつけることがよいのか、中学校からがよいのか、またこの前段にやったお母さんたちの支援、お父さんたちの支援についてもかなり幅広くやっていただいておりますので、それをもう少し見やすく、1つの表のようなものにしてご提示して、プログラムを選んでいただけるということも非常に重要かと思っておりますので、それは区や教育委員会としてしていかなければならないと思っております。その節はまたぜひよろしくお願いいたします。

定野教育長

長時間にわたりました、また始まりの時間が遅くなってしまって、予定の時間が長くなってしまったこと、大変申しわけありません。これをもちまして第5回の足立区総合教育会議、有識者の皆様のご意見の場を終わらせていただきたいと思います。本日は本当にありがとうございました。お疲れさまでした。

近藤区長

ありがとうございました。

中村政策経営課長

それでは、大変お疲れさまでございました。